詩3ッ

蜥蜴

闇は柵に凭れて
戸惑いながら女を噛んだ
女はきゅッと鳴いた
月を憎んでいたので

オオ、

背をひん剥いて
見せびらかしている緑の猿は
崩れた皮膚を打つ
彼は産まれた日を知らなかったのでこの朝も
昨日からの続き
と決めて
/オオ、太陽ヨ
/太陽ヨ
段取りよくトーテムポール
の先で傾いている
金色
の
貧しい朝に、
吐くよ

口笛も

彼は夕日に向かって立った
病んだ腕で体を支えながら
彼の犬は濁った白い目で夢を見ている
口笛も止むので

露古